

木 に な る ハ ナ シ



SPECIAL TALK SESSION

《特別対談》

田中学園立命館慶祥小学校

理事長 田中賢介氏



フォレストデジタル株式会社

代表取締役CEO 辻木勇二氏

未 来 に つ な が る



SPECIAL TALK SESSION

KENSUKE TANAKA × YUJI TSUJIKI

新設した私立小学校の理事長として木育の大切さや社会的意義を語る田中賢介氏と、森林とデジタルをつなげて没入自然体験ができる「デジタル森林浴」を提供する辻木勇二氏。このお二人に、森と人間の関わりや未来へのビジョンを語り合っていました。

同じ時期に迎えた大きな転機と
まったく畑違いの世界に飛び込んだ理由

田中 本日はよろしくお願いします。我々の小学校へお越しいただき、ありがとうございます。
辻木 いつもテレビで見ていたファイターズの田中選手がなぜ小学校を作ったのか、今日はそのあたりもお聞きできるのではないかと楽しみにしています。

田中 経歴を拝見すると、2013年頃に大きな転機を迎えられているようですね。
辻木 そうですね。財務省の役人だったところから、インターネットの世界に移ったのが2013年あたり。思い切って飛び込んだという感じでした。

田中 プロ野球選手から私立小学校の理事長になった僕が言うのも何ですが(笑)、ずいぶんと思い切りましたね。

辻木 人生は一度きりなので、やらないよりはやって後悔しよう。一方で、家族を含めた周りに迷惑をかけるわけにはいけないので、しっかりと地固めた上でチャレンジしたんですよ。

田中 僕も全く一緒です。この学校のコンセプトは「世界に挑戦する12歳」ですが、子どもの頃はリスクを考える必要はないけれど、大人になってからは失敗の幅をきちんと計算できるということが重要だと思います。

辻木 私はずっと発展途上国の開発がしたいと思っていて、財務省時代にもアフリカや中南米で交通インフラの整備などをしていました。現地の子どもたちがインターネットカフェで小銭を払ってネットにアクセスしている姿を見て、衝撃を受けて。

田中 それで、ITで人々の課題を解決する方向にシフトしたんですか。

辻木 ええ。転職したのが地方創生に熱心な会社で、私も十勝の浦幌町でのボランティアに参加しました。2か月に1回ほど浦幌に通って地域の方々と知り合う中で、林業家の方との出会いをきっかけに林業の現場や森の世界に入っていったんです。

田中 その頃、僕は学校法人設立で悪戦苦闘中でした。激動の期間がけっこうシンクロしていますね。

辻木 田中さんの転機はいつですか？

田中 僕も2013年ですね。アメリカのメジャーリーグに挑戦したもののうまくいかず、中南米のウインターリーグでベネズエラに行きました。その時に、現地の教育があまりにも未成熟であることにショックを受けました。15年にファイターズに戻って、引退を意識したときに「学校をやりたい」と思ったんです。

辻木 それで私立の小学校を。なぜ小学校だったんですか？

田中 それまで北海道には本格的な私立小学校がなかったんですよ。だったら、飛びぬけた学校を作りたいと思って。

辻木 どうせやるなら飛びぬけたいですよね。

森や木を重視した独自の教育方針で
目に見えない根の部分育てる

辻木 この小学校では木や森を重視されているようですが、それはどうしてですか？

田中 よく、子どもの成長は木に例えられますが、幼少期の教育は根の部分が重要です。たとえば学力や語学力というのは目に見える幹や枝葉の部分なんですけど、それを支える人間力というか、目に見えない根の部分育てるのはとても難しく、でもそれが一番

大事じゃないですか。

辻木 おっしゃる通りです。根の部分って、やっぱり自然の中で育つものが多いですよ。

田中 校舎を探す時にも、札幌市内で自然があって、自己資金で建てるので中古物件というのが条件で(笑)。検索する中でたまたまここがヒットしたんですが、築50年の物件だったんです。これはリノベーションのしがいがあるなど。

辻木 ここは何の建物だったんですか？

田中 最初は銀行の研修施設で、そのあと大学の宿泊施設になっていたのが売り出されていて、ギリギリ学校を作れる面積があって、隣にある森も一緒に売ってくれるというので、ここにしよう。

辻木 さっき拝見した森ですね。

田中 Forest Areaとして整備するにあたって木を伐ったわけですが、その木をちゃんと再利用したくて、この校舎にも木をふんだんに使いました。

辻木 木の校舎っていいですね、温もりがあって。

田中 そういう肌感覚を自然から学んでほしいと思って、森でもどどん遊ばせるようになっています。ありきたりの遊具から学べることももちろんありますが、本当の学びとは、日々変わっていく自然の中で自ら遊びを生み出していく。ゼロからイチを生み出す力も自然の中から生まれると思っているんです。

辻木 なるほど。自然の中で遊ばせるとは、ただ遊ばせているようでたくさん要素が詰まっている。私立校だからこそできることですね。

田中 学校説明会などでは、「自然の森で遊ぶことも大切な学び」という説明をしています。自然を活かす難しさと面白さを、保護者の皆さまとも共有したいと思っているので。



森や木に触れる学びの中で
将来に伸びるための根を育てる

森林浴の世界をITで表現すると同時に
地方創生の流れも作っていききたい

田中 辻木さんが手がける「uralaa(うらら)」ですが、森林や自然とテクノロジーを組み合わせてプロダクトを作るという発想になぜ至ったのか、教えてください。

辻木 IT技術は人の生活を便利にしたり、効率的にしたりするものですが、一方で、私たちはそれで本当に幸せになれたのかという疑問も持っているんです。

田中 スマートフォンは手離せないですし、連絡が来たらすぐ返信をと思って焦ったり、ストレスは増えているかもしれないですね。

辻木 そこで、ITを使って心を癒したり幸せになれるようなものを作ろうと考えていたとき、思い浮かんだのが浦幌町の森でした。この森に包まれるような仮想空間というアイデアが「デジタル森林浴」に至ったわけです。

田中 現代人にとって、心身をリセットできる場所が身近にあるというのはすごくいいなと思います。

辻木 日本人にとって馴染みのある森林浴の世界をテクノロジーで表現すると同時に、地方創生の流れもできるんじゃないかというところで、自然への没入体験ができる空間を作りたいと思ったんです。

田中 これは癒されますね。

辻木 本当に癒されます。初めて作ったuralaaの旗艦施設は、浦幌町の廃校になった小学校の教室を改築しているんですよ。なので、地域の方々や、小中学生の体験学習でも利用されています。たとえば、北海道の森と屋久島の森を比較してみると全然植生が違うので、それをデジタルで実感してもらいたいかなど。

田中 それが「驚きと幸せを世界のどこでも」という理念につながっていくわけですね。

辻木 こういうのを見ると、皆さんけっこう驚かれるんですよ。その後で、森の木漏れ日も感じられたりするので、気持ちが癒されて



幸せになれる。この驚きと幸せを世界に届けていきたいという思いがありまして、たとえばカンボジアの小学校などで、これが日本の森だよ、北海道の森だよ、というのを実感してもらおうのが夢の一つです。

森に包まれているような安心感は
教育の場でも日常生活でも絶対に必要

辻木 この小学校での縦割りグループをツリーと表現されていることも、木とつながっていると感じるんですけど。

田中 学校のコンセプトは木を中心に考えています。縦割りツリー、いわゆる縦割り教育ですが、児童たちは4本の木のいずれかに属していて、木には1年生から6年生まで1人ずつのチームの葉っぱがあります。その6人1組のリー



フ活動と、4つのグループに分かれたツリー活動、この2つで縦割り教育をやっています。

辻木 校章のメインカラーの緑も、北海道の森林をイメージしたものでしょうか？

田中 その通りです。木の成長、大きな木の中にみんながいるというイメージですね。

辻木 お話を聞くだけでも、森に包まれているような安心感がありますね。

田中 森といえば、デジタル森林浴にはどんな効用があるんですか？

辻木 森林浴のリラックス効果が実証されているように、デジタル森林浴のリラックス効果を科学的なエビデンスで示そうと国際論文で発表しました。15分間のデジタル森林浴にはどのような生理的・心理的な回復効果があるのかという実験を(国研)森林総合研

究所と一緒に実施したところ、たとえば、自律神経を整える副交感神経活動が上がったり、心拍変動が落ち着いたり、アンケート結果でもネガティブな感情や怒りが癒されるということが分かりました。

田中 効果が科学的に立証されたんですね。写真で見ているだけでも、実際にこの森に行ってみたくなりました。

辻木 そこがもう一つのポイントです。デジタル森林浴を体験した方にアンケートを取ったところ、93%の方がこの森に行きたいと思って、12%の方は実際に旅行ツアーまで調べていたんですよ。

田中 他にもどんな展開がありそうですか？

辻木 森林のリラックス効果ですが、これは緑色が関係しています。一方で、紅葉は逆に交感神経活動が上がってくるそうなので、そ

のエビデンスも取って、気分に合わせて楽しめるような応用も面白いと考えています。

北海道のダケカンパで作ったバットが
プロ野球で活躍するかもしれない

辻木 プロ野球の現役時代は木製バットを使われていたんですけど、道産材のバットもあるんですか？

田中 ずっとアオダモという木のバットを使っていたんですけど、最後のシーズンは北海道産のダケカンパのバットを使いました。テストしてほしいという依頼が来て、試しに使ってみたら非常にいい木だったので、試合でも使うようになって、少し粘り気のある、バット材には適した木だと思います。



辻木 粘り気……ですか？

田中 これはプロにしか分からない感覚ですけど、少し“しなる”木なんです。強く“しなる”木を育てるのはなかなか難しいそうなんです。たぶん北海道の環境がそういう木を育てているのかと。

辻木 ダケカンパは、北海道ならどこにでも生えているんですか？

田中 確か、山の上のほうに生える曲がった木ということです。だから、バットとして大量生産できるかどうかは課題なんですけど、プロのバットとしても十分使える素材です。

辻木 浦幌の山にも生えているのかな。今後、北海道のダケカンパがバットになってくれたらうれしいですね。

田中 僕も期待しています。考えてみると、プロ野球選手は木のバットに触る時間がものすごく長いので、現役時代から木には親しんでいたんですね。

50年先の未来を見据えながら
手をかけて森を育てるというロマン

田中 辻木さんは、ワークキャンプで訪れた浦幌で森や林業に触れたわけですけど、やっぱり浦幌の森には魅力があったんですか？

辻木 最初に浦幌の森を知ったというのは非常に大きいですね。自分たちが今伐っているのは50年前の方々植林した木だから、自分たちも50年先の未来のために森を育てているんだと林業家の方が語っていて、その言葉にとっても感動したんですよ。

田中 時間の流れ方がすごいですね。壮大なロマンを感じます。

辻木 北海道と東京を行き来する中で感じるのは、北海道の森林が雄大で凛としていることです。森の中に入って撮影するとそのスケールを実感します。

田中 先日、北海道大学総長と話す機会があったんですが、あのキャンパスの他にも、北大は研究林などの非常に広大な山林も持つ



デジタル森林浴の没入体験で
その森を訪れる人も増やしたい

ているそうなんです。でも、それが十分に活かされていないのが問題だと。

辻木 北海道は広いから、放置されていて誰も手を入れていない森林も多いですね。

田中 ずっと放置されていた学校の森を整備して分かったことは、森の内側の木は弱いということです。森の外側の木を伐って内側の木が外側になると、風ですぐに折れてしまうんです。木を開引いて環境圧を少しずつかけて育てることで、森はちゃんと育っていくんです。やっぱり手をかけないとダメですね。

ユニークな森での研修をはじめとして
これからの企業経営に森林が果たす役割

田中 今面白いと思っているのは、森での研修です。学校の先生たちの研修で「0円で遊具を作れ」というプロジェクトをやっているんですよ。どうやって0円で遊具を作るか、そこで森の自然を使った、今までにない発想が生まれるんです。

辻木 それは面白い試みですね。

田中 木の枝で箸を作ろうとか、木のツルを使ってロープを作ろうとか、いろんなことを考えるうちに、こんな遊具なら子どもたちのためになるよねとか、SDGsだよねとか、先生たちが複合的に考えるようになってきて。

辻木 いいですね。0円で遊具を作るという目的だけが決まっていて、フィールドは森で、Howは自分で考えるという。まさに研修ですね。

田中 鉄棒にぶら下がるのも、木の枝にぶら下がるのも一緒じゃないかと。学校では正解を教えることが多いので、森で学ぶという意味では、子どもにも大人にもいいのではないかと思います。

辻木 今の社会背景では、地球環境の問題

と企業経営がますます密接に結びついてきています。森がちゃんと呼吸をしてくれることがCO₂の削減につながるわけですし、これからの企業経営に森林の活用が果たす役割は大きいですね。

人間の成長に大事なゴールデンエイジに
森や木に触れて育つということの大切さ

田中 辻木さん、プロ野球のファンになる年齢って何歳くらいだと思います？

辻木 小学校の高学年くらいですか？

田中 5歳から9歳と言われてます。ここで興味を持ってくれないと、その後はなかなかファンになってくれないそうです。この時期は、子どもの成長に関しても非常に重要なゴールデンエイジと言われています。

辻木 なるほど、小学校だと低学年ですね。

田中 僕らの小学校のロゴはホームベースの形をしています。スタート地点でありゴール地点であるという意味なんですけど、ここを巣立った子どもたちがいろんな挑戦をして、自分が社会に貢献する立場になったときに、森で育ったことを思い出して、帰ってくる場所であつたらいいなと思っています。

辻木 ゴールデンエイジのうちに木や森に触れておく、自然の中で育つということが、人間にとって大事だというわけですね。

田中 地道な教育ですけど、それが数十年先、彼らが社会でリーダーシップをとる立場になったときに重要になってくるはずですよ。

人々を結びつける森のパワーを活かして
これからも面白い試みに挑戦し続ける

辻木 北海道には森があるのが当たり前



PROFILE

田中賢介氏

田中学園 立命館慶祥小学校 理事長

1981年生まれ、福岡県出身。2000年、東福岡高からドラフト2位で日本ハムファイターズ(現北海道日本ハムファイターズ)に入団し、俊足巧打の内野手として活躍。2012年オフに米球界入りを発表し渡米、2015年日本ハムに復帰。2019年の現役引退までに、ゴールドングラブ賞5回、ベストナイン6回。引退後に「学校法人田中学園」を設立し、理事長に就任。2022年4月に札幌市内に田中学園立命館慶祥小学校を開校。

で、今まであまり意識されていなかったんですよ。その価値を理解してもらうことで、より森と人を結びつけられるんじゃないかと思っています。

田中 森が地域のブランディングになるということですよ。森が地域のためになり、地元の企業や人々のためになるというように。

辻木 私たちの役割は、その森の入り口の一つになることです。北海道を中心とした自然や森の映像を、日本だけでなく世界に届けていきたいと思っています。

田中 森の入り口、いいですね。僕は福岡県の山育ちなので、小学生の頃はトレーニングを兼ねてほぼ毎朝、走って小さな山に登っていました。あとは山中に秘密基地とかを作るのが好きでしたよ。

辻木 私は東京育ちで、山や森はない生活で幼少期を過ごしたもので、それで大人になるにつれ、森林への憧れが強くなったような気がします。

田中 出身も経歴も違う我々が、北海道の森というテーマでこうして対談させていただいたのも、ちょっと面白いですね。

辻木 こういふチャンスがないと、なかなかお会いできなかったと思います。これも森のパワーの一つかもしれません(笑)。

田中 森でつながった仲間として、今後ともよろしくお願いします。

辻木 こちらこそ。一緒に楽しいことを考えて、北海道の森を活かしていきましょう。

CORPORATE INFO.

田中学園
立命館慶祥小学校

「学ぶを、しあわせに。」
という建学の精神で、
「世界に挑戦する12歳」
を育てる私立小学校。



校庭にはスポーツ施設でも使用される人工芝が敷かれ、子どもたちが思い切り運動を行える場になっている。

海外生活を通じて教育の重要性を感じ、北海道や札幌へ貢献したいという思いを持った田中賢介理事長が開校した、北海道で初となる本格的な私立小学校。建学の精神である「学ぶを、しあわせに。」を重視し、「Challenge(挑戦)」「Collaboration(協働)」「Contribution(貢献)」の3つのCを柱に、教育理念・目標に掲げる「世界に挑戦する12歳」の育成を目指す。校舎の内装には道産木材をふんだんに使用しているほか、併設した「Forest Area」では日常的に自然と触れ合う体験をさせている。立命館慶祥中学校・高等学校の特別提携校で、一定の基準を満たした児童は立命館慶祥中学校への特別推薦進学が可能。

学校法人田中学園 田中学園立命館慶祥小学校
〒062-0031 札幌市豊平区西岡1条7丁目2-1
<https://tanakagakuen.ed.jp>



プールを改装したホール型ライブラリーは、読書の場、集会や発表の場など、枠にとられない使い方を想定。

CORPORATE INFO.

フォレストデジタル
株式会社

没入感のある空間型VRの
デジタル森林浴を開発。
森や自然の中にいるような
空間を体験する価値を創造。



天井・正面・左右の4面大型スクリーン、マルチサウンド、木々の香り、風による没入自然体験を提供。

「テクノロジーは私たちを幸せにしているのか?」この問いに一つの解を出すために、十勝の浦幌町に起業。森や自然の高精細立体映像、葉のざわめき、森の香り、自然な風を体感しながら森林浴や旅を体験できる没入自然空間「uralaa(うらら)」を開発し、企業や自治体向けにサービスを販売している。クラウドを活用した独自の没入空間技術(空間型VR)により、いつでも、どこでも、あたかも実際に森や自然の中にいるような体験ができる「ひととき旅行」を提供。「驚きと幸せを、世界のどこでも、新しいテクノロジーを用いて、人々にwow!(驚き)とhappinessを提供します。」をミッションに掲げる。

フォレストデジタル株式会社
[本社]〒089-5633 北海道十勝郡浦幌町常室51-1 トコムロラボ
[東京オフィス]〒100-0004 東京都千代田区大手町2-7-1
TOKIWAブリッジ B2F.CO-LAB 区画C <https://forestdigital.org/>



2021年6月には、利田空浜に北海道の食と共に景色を楽しむことのできる「uralaa park haneda」がオープン。